吉祥寺ハモニカ横丁のつくり方

倉方俊輔 編

形見一郎
隈 研吾
塚本由晴
手塚一郎
原田真宏
三浦 展

彰国社

吉祥寺ハモニカ横丁のつくり方

倉方俊輔　編

形見一郎
隈　研吾
塚本由晴
手塚一郎
原田真宏
三浦　展

彰国社

はじめに

理性と野生と横丁と

倉方俊輔

「住みたい街ナンバーワン」吉祥寺の駅前に広がる「昭和の匂い漂う」ハモニカ横丁。こんな形容が一般的になった現在（二〇〇〇年以降）のハモニカ横丁から考えてみたい。写真や資料、関係者へのインタビューを通して、その魅力の中を彷徨い、どうやったらこれがつくれるかという問題提起を行いたい。

まず、吉祥寺について説明しなくてはいけない。ここは同名の寺院の門前町として野生した……わけではなく、いわば江戸の都市計画の産物である。

一六五七年の明暦の大火で本郷元町（現在の文京区本郷一丁目）にあった吉祥寺の門前町が被災し、翌年の大火によって寺も焼失したことで、幕府は同地を大名屋敷に変えることにし、代替地を与えた。この土地を開墾したのが旧吉祥寺の門前町にいた人々だったため、その名が付いた。

駅の開設は一八九九年と早いが、付近の東京西郊と同様、人口が急増するのは一九二三年の関東大震災で都心が罹災した後だ。一九三四年には渋谷との間に帝都電鉄（現・京王井の頭線）も通るようになり、鉄道インフラとしては現在と同じ形となった。

三角定規を思い浮かべてほしい。三〇度の角を吉祥寺に置き、水平に伸びた先を山手線に当てると、だいたいその直角の辺りが新宿、六〇度の角が渋谷で、どちらも電車で一七分ほどだ。住所で言うと東京都武蔵野市となり、駅を少し南下した井の頭恩賜公園の辺りからは東京都三鷹市。

三角定規を思い浮かべると、それを手にしていた一九七〇年代に心が帰る。小学校低学年の自分にとって、ハモニカ横丁は印象に刻まれる空間であると同時に、日常的に訪れる場所だった。狭い暗がりを入った先に寝転んだ魚の鱗は、電球に照らされて光っていた。物が新鮮で、普通の店には置いていないアラなども並んでいるからと言って、母はハモニカ横丁の鮮魚店を贔屓にしていた。当時、駅前通りにあった、大小の卵が一個単位で買える鶏卵専門店や色とりどりの飴がガラスケースに収まった飴菓子店、時折見かけた傷痍軍人などと同程度の、日々の暮らしの中にある違和感だった。やがてそれらが消え失せても、ここだけは健在で、駅からの帰り道にその中を通っては、閉塞感にホッとしていた。

この狭さや暗さが、戦後のヤミ市に由来することも有名である。ヤミ市とは一九四五年の敗戦後、空き地に並んだ不法占拠の露店に始まり、次第に建物の体裁と社会的位

置付けを整えた市場のこと。ハモニカ横丁は新宿の思い出横丁と共に、当時と同じ場所で残存する全国でも珍しい例だ。ヤミ市の学術的な研究は二〇〇〇年以降に大きく進展し、ヤミ市のほとんどが一九四九年のGHQの指令によって消滅し、残った建物も一九六〇年代に集中してビルなどに整理されていったこと[※1]、そんな中で吉祥寺の一等地に三〇〇〇平方メートルもの横丁が残存した理由として、江戸時代の開墾以来の大地主である月窓寺が土地所有者だったことなどが指摘されている[※2]。

現存数の少なさと並んで、ハモニカ横丁が際立って形容される背景に、周辺の変化があるだろう。吉祥寺がしばしば「住みたい街ナンバーワン」と呼ばれるのは、情報誌『東京ウォーカー』の「住みたい街ランキング」で二〇〇五年から連続一位であることが大きいが[※3]、現在のように幅広い世代を対象とした住宅地であり、来訪者も多い商業地でもあるという興隆は、高度成長期に策定され、一九七〇年前後から実施された百貨店誘致や道路整備事業に基礎付けられている。吉祥寺は戦後の都市計画の産物でもある。一九八七年の北口駅前広場の竣工で完成した骨格の上に一九九〇年代以降、さらに住宅地側へと個性的な店舗が展開した。

そんな動きが、かつての中心へと還ってきたのが、現在のハモニカ横丁の姿と言えるかもしれない。今日の飲食店街のイメージへの大きな転換点となったのが、一九九八年の「ハモニカキッチン」の開業であることは、この変化に肯定的な人にも否定的な人にも共有されている[※4]。駒沢の人気カフェ「バワリーキッチン」の内装を手がけた形見一郎を起用して同店を生み出した手塚一郎は現在、ハモニカ横丁内に一三店舗を展開している。その中のおでん屋「エプロン」はアトリエ・ワンの塚本由晴によるデザイン、焼鳥屋「てっちゃん」は隈研吾のインテリアだ。さらには吉祥寺を飛び出し、隣の三鷹駅前でビルをコンバージョンした「ハモニカ横丁ミタカ」をマウント・フジ・アーキテクツ・スタジオの原田真宏らの設計で開業した。

これは商業主義が古き良き昭和を食い尽くす最終段階なのだろうか。あの懐かしく変わらない横丁はどこに行ってしまうのか。

理性はそう嘆こうとする。でも、現在のハモニカ横丁を訪れると、変わり続けるものにワクワクして成長してきた心は騒ぐ。光と闇、ぞんざいと繊細、古びと新味のあまり見かけない塩梅に身体は反応する。例えば大阪で、札幌で、那覇で、ブルックリンで、リスボンで、メルボルンで、似たような印象を受けた記憶が蘇る。

そして、この感覚を表す言葉がないことに気づき、愕然とする。まずいのではないか。

こうした空間を懐かしみ、ただ駆逐されるのを待つのではなく、つくれないといけない。いまだに足りないのは、そのための作業だろう。インタビューした対象を記録するだけでなく、触発し、言葉を引き出すこと。目の前の物を数量的に捉えるのではなく、五感で掌握し、その場でつくった論理の網で見返すことが必要ではないだろうか。

そこで、今のハモニカ横丁をつくることに関与した形見一郎さん、原田真宏さん、塚本由晴さんにお会いし、横丁で生まれた考えを開示していただいた。隈研吾さんには論考を書き下ろしていただき、訪問記で応えた。すでにあるものに、いかに関わるか。インテリア、建築、まちづくりを横断した、これからのデザイン思考が浮かび上がるだろう。

吉祥寺との関係も深い三浦展さんには、「いま・ここ」から参与的に観察する本書の射程を広げていただいた。『下流社会』『ファスト風土化する日本』『第四の消費』をはじめとした数多の著作が新たな像を結んだのも、ハモニカ横丁のマジックだ。

手塚一郎さんには一種のアーティストとして尋ねてみたいと思った。そのような取材が可能だということ自体が、現代のビジネスに対して示唆的ではないか。すべての対話に同行いただき、事実関係を補っていただいた。また模型や図面をできる限り集め、ヒューマンスケールの横丁や路地への関心にも応えようとした。横丁写真集としても、熱い人間の息遣いを冷静な建築的手法で捉えた。懐古では遅すぎる。記録しないといけない。

さあ、ハモニカ横丁に分け入ろう。ここでは瑣事と大事、過去と現在、主体と客体も溶け合い出すに違いない。酩酊しているのではない。「横丁の思考」でありたいだけだ。

註
※1　橋本健二・初田香成編著『盛り場はヤミ市から生まれた』青弓社、二〇一三年
※2　井上健一郎『吉祥寺「ハモニカ横丁」物語』国書刊行会、二〇一五年
※3　斉藤徹『吉祥寺が「いま一番住みたい街」になった理由』ぶんしん出版、二〇一三年
※4　桑原才介『吉祥寺 横丁の逆襲』言視舎、二〇一一年

目次

倉方俊輔　〇〇二

ハモニカ横丁地図　〇〇四

はじめに　理性と野生と横丁と　倉方俊輔　〇一〇

総合芸術としてのハモニカ横丁　手塚一郎　〇四六

「ハモニカ的」を都市に呼び戻せ　隈 研吾　〇五八

ハモニカキッチンから始まった　形見一郎　〇九〇

ハモニカ横丁を生成する　原田真宏　一二六

横丁から始まる静かなる革命　塚本由晴　一六四

ハモニカ横丁に問いかける　三浦 展

ハモニカ横丁に問いかける　倉方俊輔　〇五六

「てっちゃん」訪問記　煮込まれた建築の神髄　二一〇

あとがきにかえて　横丁からの「現代ワーク」　二三〇

編者略歴　二三一

写真クレジット　二三二

総合芸術としてのハモニカ横丁

手塚一郎

闇の中に挿入された真っ白な箱　〇一六頁
動きながらつくり、変えていく　〇二一頁
先鋭を大衆化させる大資本　〇二五頁
フランチャイズから逃れる　〇三一頁
初原的な商売のかたち　〇三五頁
手塚式経営手法　〇三七頁
チャンス・オペレーションを鍛える　〇四一頁

手塚一郎

てづかいちろう

1947年、栃木県生まれ。1972年、ビデオ情報センター設立。国際基督教大学卒業。1981年、ビデオインフォメーションセンター設立。1979年、吉祥寺にてビデオ機器、メディアソフトの販売店「VIC」オープン。1970～80年代、数多くの舞台作品を記録映像として撮影。1998年、「ハモニカキッチン」開店。現在、ハモニカ横丁内13店舗（うち12が飲食店）、世田谷区北沢1店舗、渋谷区道玄坂1店舗のほか、全28店舗を展開。

闇の中に挿入された真っ白な箱

倉方　手塚さんはこのハモニカ横丁で現在一二の飲食店を営んでいますが、その筆頭が、一九九八年にできたハモニカキッチンですね。あの真っ白な空間は、暗いハモニカ横丁の中で異彩を放っていました。

手塚　当時、この横丁は夜になると居酒屋がいくつか営業している程度で、真っ暗だったからね。僕はここでビデオ機材やテープの販売店を営んでいたのだけれど、二階が空いていたから仲間と一緒にバーの真似事をしてみた。これが最初のハモニカキッチンです。週末だけの営業だったんだけど、結構楽しかったんですよ（笑）。その後向かいのお茶屋さんが閉じたので、そこもハモニカキッチンにすることにした。こういう真っ暗な横丁に、青山あたりにありそうなお店をポツンと入れると面白そうだと思ったんです。シャッター通り化していたから何でもできそうだったしね。そこで、駒沢のバワリーキッチンを手がけた形見一郎さんに相談してつくったのがハモニカキッチン新店（二〇〇〇年）。ローコストでいかに格好いい店にするか、形見さんは相当研究してくれたと思う。その後、隣に焼鳥屋てっちゃん&フードラボ（二〇〇三年）、モスクワ（二〇〇六年）と出店していきました。

倉方　どうして焼鳥屋をやろうと思ったんですか？

手塚　隣の店主に「お店を畳むからここを借りないか」と言われて考えたのが、「食べる」「売る」という食を総合的に扱う「フードラボ」です。キッチン用品や食材、お酒を売り、さらに一階では焼鳥屋もやろうと。映画『ブレードランナー』に出てくる横丁には、暗い闇と打ち水された道に光が反射し、煙があふれている。あれを観て、焼鳥で煙を出してみたいと思ったんです（笑）。でも、うまくいったのは焼鳥屋だけで、物販は難しかった。コンセプトはつくれても、形にするのは大変ですね。

倉方　事業形態が決まって、お店の形ができても終わりじゃない。

手塚　むしろ、そこからが真剣勝負。その中でも焼鳥屋はうまくいって、土日になると満員でお客さんが入れないような状況になってきた。そこで、ハモニカキッチンとの間の壁を抜いて拡張することにしたんです。その時にお願いしたのが、建築家の隈研吾さん。

　当時、すでに一三店舗を運営していたんだけれど、どうしても自分たちの枠から抜け切れないと感じていたんですね。何か面白いことをやりたいと思っていたら、建築

ジャーナリストの淵上正幸さんが現れて、隈さんならやってくれるんじゃないかと言い出した。慌てて企画書を書いてお願いしたら、本当に引き受けてくれた。びっくりしましたね。さらにもっと面白いことができないかと、イラストレーターのテリー・ジョンスンさんに壁面と提灯をお願いした。

倉方　やんちゃな絵ですね（笑）。

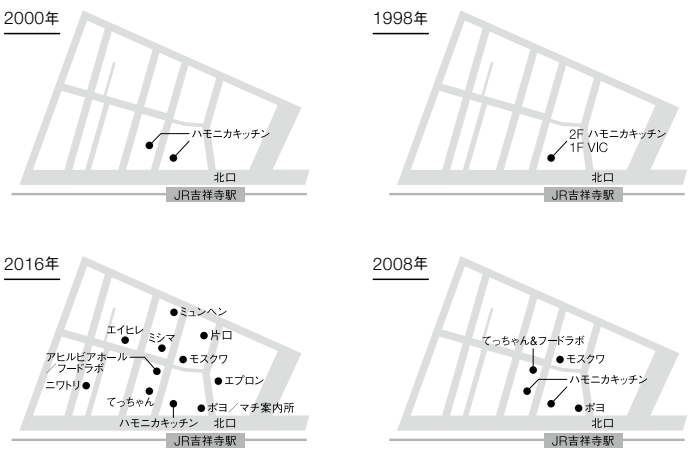
手塚　これでもテリーさんは自制しているんですよ。本当はもっと激しくする予定だった（笑）。ポップで明るいというのがこの横丁に合うなと。

　売れているお店を増築するのは、非常にいいやり方なんです。猪瀬直樹の『土地の神話』によると、アメリカのメーシーズが増築を繰り返している様子を見た小林一三は、経営というのはこういうふうにやるんだと部下に語ったそうです。たしかに、お店を大きくするなら、違うところで始めるのではなく、増築すればいい。経営上、安全なんですよ。

　店を開こうと思ったら、まず物件を探す。いい物件は取り合いになるから、見つけたらすぐにお金で押さえる。そこから家賃が発生するから、すぐに内装を決めなくてはならない。お金が生じる仕組みに対応して、一カ月くらいの間にバタバタバタッと

焼鳥「てっちゃん」の壁面は
テリー・ジョンスン（湯村輝彦）氏によるアートワーク

ハモニカ横丁 手塚氏が手がけた店舗の変遷



つくっていくんです。そんな状況だから、内装はどうしても何かのパクリみたいなものになりがちで、なかなか新しいものが出てこない。インテリアの人は、短時間に膨大な案件をこなさなくてはならないから大変だろうと思います。

その点、建築の人はゆっくりしていますね。塚本由晴さんに「エプロン」（二〇一二年）をお願いしたとき、時間の流れ方がずいぶん違うと思いました。

倉方 塚本さんにお願いしたのは、どういうきっかけですか？

手塚 塚本さんが学生を連れて、ハモニカキッチンを見学していたんですよ。そのときに名刺交換をしたのが最初の出会い。その後、おでん屋をやることになったとき、建築家なら僕にわからないことをやってくれるんじゃないかと、塚本さんに相談したんです。

工事が始まり、スケルトンだけが残った現場の前で、塚本さんがジーっと黙って立っていた様子は印象に残っていますね。僕は不思議に思って、「どうしたんですか？」と聞いたら、どうしてこれが立っているのかわからないと言う。建築家にしてみたら、建物の体（てい）をなしてなかったんでしょうね。そのあと鉄骨を入れたらちょっと安心したようでした（笑）。

動きながらつくり、変えていく

倉方 手塚さんは大学で美術を専攻していたんですよね。

手塚 ドラッカーを勉強しようと思って、ＩＣＵ（国際基督教大学）に入学したんだけど、英文だらけでちっともわからなくて（笑）、美術に転向したんです。卒業論文では、ミースの建物からマルセル・デュシャンの作品、ジャン・ピアジェの発生的認識論、さらに入沢康夫まで引用しながら、わけのわからないことを書きました。タイトルは、「同じものが二コ、パラノイアパラノイア」。

高校時代はテニスと書道をやっていたんだけど、当時活躍していた岡本太郎にも影響されて（笑）、アクションペインティングみたいな手法に傾倒しました。巨大な字を書く感覚とスポーツは似ているんですよ。でも、ひとりで大きな字を書いていると、ストイックな状況に陥ってきて、このまま続けていると頭が狂ってしまうと思った。それで、大学では演劇をやりました。みんなでつくれるからね。

大学では舞台づくりや演出をやっていたんだけど、劇団四季みたいな舞台装置を中